

児童・生徒の国際性をたかめる方策について

—海外の日本人学校の児童・生徒の国際性に関する調査研究を踏まえて—

Strategies for Promoting the Internationality of Overseas Japanese Students
—From Research on the Internationality of Students of Overseas Japanese Schools—

田浦 加津子 (Taura, Kazuko)

In seeking to acquire concrete data concerning the problems and issues of the internationality of overseas Japanese students, earlier research was carried out at the Japanese Schools of New York and Kualalumpur. In this paper, the author discusses seven strategies for promoting the internationality of overseas Japanese students.

まえがき

日本が21世紀の世界で重要な役割を果たすためには、国際化することが重要な課題の一つである。そのためには国民の考え方の現実を把握し、その長所やよい伝統を生かし、その短所と問題点を克服していくことが重要である。特にアジアの地域で、日本が過去に犯した侵略的行動を反省し、アジア諸国民の信頼を得るためにも、国際化していくことが大切である。

私は国際化が要求する資質を国際性と名づけたが、国際性は、自国文化の長所を理解し、他国の文化に建設的に接し、自国の文化と他国の文化を客観視し、両者の長所を省察し、国際化が必要とする資質すなわち能力や価値観や態度を育成することをめざすものである。

このことは、将来の日本を担う子どもたちにとっても、人間形成上大きな課題である。そのためにはどうしたらよいか、この問題意識から、国際性についての実証的データを集め、検討を行うこととし、ニュー・ヨーク日本人学校とクアラルンプール日本人学校との児童・生徒の国際性について、調査研究を行った¹⁾。そこで両校の調査研究の結果を比較するとともに、国際性を高めるための方策について検討したい。

I 二つの日本人学校の調査研究の比較

児童・生徒の国際性についての調査研究にあたって、ニュー・ヨークとクアラルンプールの二校を選んだことについては、前回の報告で述べたので、再録しない。両者とも質問紙調査を主とし、インタビュー調査も可能なかぎり行った。

質問紙調査はニュー・ヨーク日本人学校(以下NYと略す)では、1997年2月に、小学4年から中学2年までの182名について行った。クアラルンプール日本人学校(以下KLと略す)で

は、1999年6月に、小学4年から中学3年までの172名について質問紙調査を行った。

質問紙の調査項目の中には、直接国際性に関連しないものも含まれているが、以下、国際性に関するものを重点に、共通した問に対して両者の調査結果を比べ、コメントを加えたい。

質問 a 好きな科目を選んでもらったところ両者共通して体育と図工が多かった。

質問 b きらいな科目を選んでもらったところ、両者共通して数学（算数）と英語が多く、KLでは音楽があげられている。

質問 a, b を合せて考察すると、数学、英語のような用具教科が敬遠され、図工、音楽のような内容教科が好まれていることは注意をひく点である。数学や英語は、児童・生徒の興味に直結しにくいし、骨のおれる教科であるので、敬遠される傾向があることは、日本の一般の学校でもみられるところである。

質問 c 「英語は得意ですか」についてみると、両者とも得意であると答えた者が過半数を越えているが、得意でないものも相当数いる。

質問 d 「英語をもっと勉強したいか」上達意欲についてたずねたところ、両者とも半数近くが勉強したいと答え、上達意欲は高くなっている。

質問 e KLについて、「外国語を知りたいか」の問に対して、「知りたい」44.8%、「知りたくない」が53.5%で、後者がたかい。前者についてみると最も多いのは、「マレー語」が45名中58.4%であり、次いで「英語」「中国語」となっている。

質問 f 「日本人で仲のよい友だちがいるか」についてみると、NYで83.8%、KLで87.8%であり、両者ともに多いといえる。

質問 g 「外国の人で仲のよい友だちがいるか」についてみると、NYでは「アメリカ人の友だちがいる」と答えた者50.5%に対し、KLでは30.8%であり、NYに比べ20%位の差がある。NYに比べ、KLでは、外国人の友だちが少ないことを示している。

質問 h 「先生と話しをするか」については両者とも、共通して95%の者が話しをすると答えている。

質問 i 「テレビ番組を見るか」については、両者の間に差異がみられ、NYでは88.5%が見ているのに対し、KLでは38.9%にとどまっており、59.9%がテレビを見ないと答えており、テレビの媒体にふれることがNYに比べて著しく低い。

質問 j 「映画館や博物館等へ行くか」については、NYでは91.4%が行くと答えているのに対し、KLでは52.3%にとどまっており、それぞれの文化に触れる度に差異がみられる。

質問 k 「塾やならいごとを行っているか」については、NYでは54.2%となっているが、KLでは91.8%と高くなっている。ならいごとをしている場合は、ともに英語を学ぶことが上位を占めている。

質問 m 「日本の生活より楽しいか」については、NYで31.3%が楽しいと答え、KLでは34.3%が楽しいと答え、両者は似かよっている。

質問 n 「学校で楽しいことは何か」については、両者とも「友だちとの交わり」を多くあげており、「いじめがすくない」ことも共通にあげている。

質問o 「外国の生活で良いこと」については、NYの場合、1. 「土地が広い」 2. 「新しい経験が得られる」 3. 「ものが便利」 4. 「英語が学べる」の順に多い。KLの場合、1. 「新しい経験が得られる」 2. 「珍しいものがある」 3. 「英語が学べる」 4. 「自由である」 5. 「土地が広い」 6. 「マレー語が学べる」の順に多い。

両者に共通しているのは、「新しい経験が得られる」「土地が広い」「英語が学べる」などである。国際性をたかめる上で、よい体験をしていると言える。特に「新しい経験が得られる」ことは、海外で生活する者にとって重要な視点であり、「英語が学べる」ことの他に、KLの場合、「マレー語が学べる」をあげていることも、マレーシアでの生活ならではの要素である。

II 国際性の指標と評価

II-1 国際性の指標

今回の日本人学校の児童・生徒の生活状況についての質問の中で、児童・生徒の国際性を知る上で、最も重要な指標となるのは、質問m「外国の生活は日本にいたときの生活より楽しいか」つまりアメリカやマレーシアの生活の満足度や適応度に対する、児童・生徒の反応である。なお附加的に両親の「外国文化への評価」等についても調べ、子どもの反応との相関をみた。

質問mに対して、「たいへん楽しい」と答えた者と、「楽しくない」と答えた者に分けて、それぞれ他の要素との相関をみた。この場合要素として取りあげたのは、次の6項目である。1. 滞在年数 2. 質問c「英語が得意か」 3. 質問d「英語をもっと勉強したいか」 4. 質問g「外国人の友だちがいるか」 5. 質問i「現地のテレビ番組を見るか」 6. 質問j「映画館、美術館、博物館などに行くか」。

国際性の指標のたて方は、NYとKLの日本人学校とも大体同じで、比較しやすいようにした。質問eの外国語についての質問は、NYとKLはちがっているので、ここでの比較検討では省いた。

II-2 国際性の指標の相関についての比較考察

(1) 外国生活の満足度・適応度

NYで31.3%、KLで34.3%が「楽しい」と答えている。「楽しくない」と答えた者は、NYで小学部の場合101名中7名で7%、中学部の場合81名中8名で10%である。合すると182名中15名で8.2%である。「楽しくない」と思っている者はKLの場合、小5で1名、小6で2名、中2で2名、中3で2名となっており、合計すると172名中7名で4%である。「楽しくない」と答えた者の割合は、NYの8.5%に比べ、KLは4%でKLの方が少ない傾向を示している。

(2) 滞在年数との相関

NYの場合、滞在年数が相対的に長い者にアメリカ生活への適応度が高い傾向がみられ、「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者は滞在年数が短いことが示された。これに対して、KL

の場合、滞在年数が長いか短いかは「生活が楽しい」とするきめてにはなっていない。このちがいがなぜ生じたかについては、分析しにくい面がある。NYの場合、英語を学習する期間がながいと、現地の生活の理解が深まると考えられるが、KLの場合は現地語を学習する意欲はたかくないので、滞在年数そのものが、生活の楽しさの要因となる度合はすくないと考えられる。

(3) 外国語の能力・上達意欲

NYでもKLでも、共通して英語の上達意欲は高い。英語の上達意欲をもつことは、NYの場合アメリカ生活の適応度を高めるのに必要であるとともに、国際性の視点からみても大切なことである。マレーシアは、マレー語を国語としているが、英語はかなり通用する国であるので、英語の上達意欲があることは生活の満足度をたかめる要素になるといえる。KLの場合、マレー語への関心が高い者が相当数いることは、国際性の視点からみて望ましいことであるといえる。

(4) 外国人の友人

NYの場合、「アメリカ生活が大変楽しい」と答えた者は、日本人の友人とともにアメリカの友人が多いことが示された。逆に「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者にアメリカ人の友人が少ないか、全くない者が多かった。KLの場合は、NYに比べて、外国人の友だちをもっている者の割合はすくないが、これが「生活の楽しさ」を左右する要素になってはいない。このちがいがどうして生じたかの分析は必ずしも容易ではないが、NYでは英語を使って会話する難しさに比べ、KLでマレー語を使って会話する難しさの方が大きいためとも考えられる。

(5) 文化施設への接触度

NYの場合、アメリカの生活への適応度が高い者に、博物館、美術館等への接触度が多い。逆に適応度が低い者は、文化施設への接触の度合がすくないことが示された。KLの場合、文化施設の接触度は、NYに比べて低いが、KLの場合、特に中学生で「生活の楽しさ」と「文化施設の接触度」との相関は高い。

(6) 親の態度と子どもの生活の満足度

「外国の生活が楽しくない」と答えた子どもの場合、NYもKLもともに両親、アメリカの場合は特に母親が外国人との交際に消極的であること、その国の文化社会及びその国の人々の生活態度についての両親の評価が低いことを示している。子どもの国際性を高めていくには、両親のこれらの面での態度の向上が不可欠と考えられる。

(7) 教育環境

「外国の生活が楽しい」と子どもたちが答えた理由の中で、NYとKLともに、「環境がよい」という要因をあげている者が多かった。

私が訪問したニュー・ヨークグリニッチ本校、クアラランプールの日本人学校のいずれも、環境がすばらしいことに感心したが、学校はやはり環境のよさが重要であって、居ながら子どもたちは自然に親しみ、自然を大事にする気持をもち、伸び伸びとした気持になることができるように思われる。両者ともに教育設備は充実しており、KLの場合、プールが50mのもの

と25mのもの2つあり、1周400mトラックを備えたグラウンドをもっていることは一種の驚きであった。また人間関係の面でも、日本の学校にありがちな「いじめ」がないことも「生活が楽しい」ことの重要な要因であると言える。

Ⅲ 児童・生徒の国際性向上の前提

Ⅲ-1 親のもつ意識・価値観の改善

KLの調査をして明らかになったことの1つは、日本の大人たちが、アジアの文化や生活への評価を高めるように改革する必要があるということである。KLの子どもの親たちは、どちらかといえば日本のエリートであり、教養は高い層にあると思われるが、「マレーシアの生活が楽しくない」と答えた子どもの親たち、特に母親のもつマレーシアの文化、マレーシア人の生活への評価が低いと思われた。

子どもの国際性をたかめるためには、親たちの外国文化や生活への評価をたかめ、国際感覚についてもっと向上する必要がある。

この点については、アメリカのハーバード大学教授であり、日本史・日本文化の研究者として有名なエドウィン・O・ライシャワー (Edwin O. Reischauer, 1910-1990) の忠告に耳を傾ける必要がある。

日本人は上下の関係でしか国際関係を眺められず、西洋には劣等感を、アジアには侮蔑感でしか接することができなくなったのは、そして弱肉強食の視点でしか世界を見られなくなったのは、日本の地理的歴史的条件によるものと思います²⁾。

同氏はこのように日本人がアジアの民族や文化に対する優越感を捨てることの大切さを指摘している。地理的条件とは、すくなくとも多くの国と国境を接したヨーロッパのような状況とちがいで、島国で外界から隔絶していることによって、自分たちはユニークな同質的存在であるという意識をもってきたことを言っている。また歴史的条件とは、すくなくとも上からの規制が強く、陰に陽に統制された社会で、人間を鋳型に押しこむ傾向をもっていることを言う。これはまた集団志向性や天皇中心の国家観と関連しているが、個性が抑えつけられ、人類的理解を欠いていることを言う。

戦後、国民主権が憲法でうたわれてから50余年になるが、未だに「日本は天皇を中心にした神の国」が一国の首相の口から出るほどで、国家観の改革は実現していない。戦前とちがうのは、首相への批判が強くあることであるが、首相は撤回せず、国家観の改革は行われていない。この種の考え方は、自民族中心主義の考え方とも結びつく可能性が大きい。

自民族中心主義とは、自文化中心主義でもあり、自己の所属する集団民族の文化に基礎をもつ価値ないし価値観を絶対化し、それを基準にして文化的背景の異なる人々の行為や存在様式について価値判断を下す態度ないし見方をいう。この見方は外国人を外人として、異質なものとしてみることや、自民族中心の観点から、敗戦を終戦、占領軍を進駐軍と呼んだように、事態を自己流に歪曲して捉える発想にもみられる。アジア民族や文化への優越感もその一表現で

ある。自民族中心主義を克服するには、文化相対主義について学ぶ必要がある。文化相対主義は、どの文化もそれぞれの環境や状況への最適の適応方法として歴史的に形成されたものであり、すべての文化がそれなりの価値や特色を内在しているという捉え方をしている。

Ⅲ-2 文化相対主義の視点

民族によっては、数能力に優れているものもあれば、個体識別能力に優れているものもある。したがって、1つの尺度で民族の能力の優劣を論ずることは適切ではないと思われる。この点で文化相対主義の見方が大切である³⁾。

しかし文化相対主義の考え方にも問題がないわけではない。文化相対主義の考え方は、文化人類学の分野で1940年代から盛んになってきたとあってよいが、西欧文明人の自民族中心主義に対する反省から、国際理解の鍵として、寛容の精神を学問的に裏づけようとして主張されたものとして評価されている。しかし他方、文化があくまでも相対的なものだとするならば、人類に普遍的価値の基準がなくなり、また異民族同志が相互に理解しうるための、共通の基盤も存在しえないことになると批判し、人類文化には、相対的・多様性とならんで、人類としての普遍性・一様性が存在することを強調する考え方もある⁴⁾。

これからの日本人は、自民族中心主義や集团的利己主義を克服し、他の文化や、民族への寛容とその特色の評価をしていく努力を必要とする。それとともに、人類の平和、民主主義の確立、真理の追究をしっかりと価値の座標軸にして、国民としての文化的質をたかめていくことが重要である。しかしこの道は平坦ではなく、多難であることが予想される。

Ⅳ 国際化教育の課程の改革

Ⅳ-1 国際化教育の視点

ライシャワーは、これからの時代で重要な役割を果たすのは、「真の国際化教育である」として、その視点を次のように述べている。

真の国際化教育は、個性を尊重しながら他者の立場に立てる教育です。自分は何者かを考えるとき、自分は何よりも「自分という個人であり、それ以外の何者でもない。」これが第一です。次に、現代という危機の時代の人類の一員であることを確認する。三番目に、ようやく、たまたま日本という国家に属していることを学ぶ。これが国際化教育における世界認識です。この自分と世界と国家を位置づける国際化教育が、いま最も大切な課題です⁵⁾。

ライシャワーはこのように、国際化教育の世界認識を示している。国家主義的な考え方にたち、個の存在とか人類との関わりに消極的・否定的な日本の相当数の人々にとっては、驚くような発言を、かれは行っている。たしかにこれからの国際化教育にとって、個の存在、人類の一員、国家の構成員という三位一体の認識は、大切な視点である。従来の日本では、家族・村・町の共同体が強調され、社会認識を欠落して、国家が強調され、人類の視点も稀薄であった世界認識を、乾いたスポンジが水を吸収するように、子どもの文化化 (enculturation) の過程で

重視されてきた。このような認識を捨てて、個の存在、人類共同体を重視することは、容易でない課題である。難しいけれども達成しなければならないことを、21世紀の時代は要請していることは確かである。

このような国際化教育は、外国文化に接する子どもとその親の課題でもある。現地の生活をしている場合、親は直接的に国際化の教育をうけることはないが、親として現地の生活をする場合、このような視点を大切にし、生活の中でくりかえし反省し、課題として意識し、実現の努力をしていくことが大切である。

Ⅳ-2 国際理解の教育過程

子どもの国際理解の教育については、NYもKLも大きな努力をしており、この点は大いに評価すべきものがあつた。特にKLの場合の国際理解教育の教育課程は各教科との連携を念頭にいれ、子どもの発達段階を考慮している点で注目すべきであり、また教育方法として、実地研修を行っていることは評価されるべきであると考え、この点については後にふれる。

KLの国際理解教育の計画は別表(注の後に記載)に示されているように、綿密で優れたものとして評価でき、日本の学校での実践にも参考になると思われる。

この教育計画の実現にあたっては、注入教育に陥ることなく、課題解決学習の方法が奨励されるべきであることは言うまでもない。

国際理解の体験的学習の計画として、マレーシアのKLでは、マレイカンボン(故郷)ホームステイを実施している。これはマレーシア人の家庭に寝泊まりして、一緒にすごすという体験を通して、この国の伝統や習慣、考え方などを学ばせ、実感を伴う国際理解の場とする計画をいう。参加者は中学部生徒と教職員で2泊3日の期間で行われる。第6回目の計画は、平成10年に7月31日-8月2日にかけて、ジェムポールのルネックという農村で行われた。予めマレー語学習が集中的に行われ、交流会のオリエンテーションが行われる。訪問の第1日は、現地に着いたあと各家庭に分散し、里親家族ごとに活動する。第2日も活動は続行され、夕方一同に会い交流会。第3日目の午前は里親家族と活動を共にし、昼に離村して日本人学校へ戻って解散になる。

物や金にとらわれず心豊かに暮らす村人と生活を共にすることで、マレーシアの文化を理解し、ともすれば日本の子どもが失ってしまったもの、相手の立場を自然に考える態度、相手の価値観や生活習慣を認め、それを体験していく異文化理解を行う機会が提供されている。

子どもたちが書き記した感想文をみると、共通して、人に対する優しさ、笑顔での受入れ、田舎の生活の体験、マレー料理づくりの挑戦などの経験は、国際理解に実践的に役立っているとみることができる。言葉の不便さ、箸等を使わず右手で食べる習慣、凍るほど冷たいマンディ、懐中電灯をつけての外のトイレなどの経験には面くらったようではあるが、マレーシアの農民の生活を直接体験できたことは、優れた国際理解教育ということができ、国際理解教育の重要な方策を示している⁶⁾。

小学部でも、中学部の成功に学んで同種の計画は、1998年に中学部と並行して第1回のもの

が、クアラクラン・ジエルブ・チェノー村で4年から6年まで合計55名参加した。中学部に比べ、遊びが中心であった。学校ではこのホームステイを国際理解教育の絶好の場として、学校行事として位置づけた。

Ⅳ-3 コミュニケーション能力の育成

外国人との関係について、ライシャワーは、コミュニケーションの力が重要であることを強調して次のように主張している。

外国人との関係では、価値観も行動様式も違うので、話し合わなければ誤解は拡大され、非常に奇妙な結果を生みます。したがって、日本人が国際化を図るには、明確に意見を表現し、相手を説得するというコミュニケーションの基本ルールを身につける必要があります⁷⁾。

日本的なコミュニケーション、つまり察しの美学は、本質的には同質社会に有効な情報回路で、日本人と外国人が会話をする場合の基本的な回路は、異質の存在の間でも有効に働く基盤上に設計されていなければならないのです⁸⁾。

このようにライシャワーは、コミュニケーションの能力、自己の意見を明確に表現し、相手を説得する能力を鍛えることの必要性を強調しており、傾聴すべき発言である。このような認識は、日本人学校の親たちにぜひ必要なことである。

子どもたちも、他者の意見に耳を傾け、自分の意見を積極的に表現する訓練や習慣を少年の時から身につけるように努力することが必要である。そのためには教師による教育指導が、子どもを伸び伸びと活動させ、積極的に意見を発表させる習慣を身につけさせることが大切である。NYもKLも、この点では、日本国内の学校に比べて、数段努力のあとがみられる。自己表現の習慣や能力をもって、日本に帰国しても、学校の中でおしつぶされる傾向があることは遺憾なことである。

Ⅳ-4 歴史教育の改革

ライシャワーは、国際化の実現のためには、歴史教育が重要であることを指摘して、次のように述べている。

世界の正確な理解は、若いころの感動と世界を知ろうとする不断の努力でしか得られません。これが教育改革の必要な理由です⁹⁾。国際教育で重要な科目の一つは歴史です。歴史教育は、自国の歴史も人類の経験の一部とする視点で貫かれていることが必要です。自国を他国と違う優れた国家として描いたり、そのユニークさを強調しない教育です。戦争に勝った将軍や元帥を英雄として祭り上げないことも、その一つです。その「英雄」は、国家が角逐していた時代の偶像ではあっても、二十一世紀に必要な要素ではありません¹⁰⁾。

二十一世紀に自己中心的な国家主義を振りかざす国は、世界で重きをおかれたいでしょう。二十一世紀世界には、軍事力や経済力の強大さでなく、世界への貢献度が国家の偉大さを計る尺度になるからです¹¹⁾。

ライシャワーのいう歴史教育の考え方は当を得たものと考えているが、国家主義的な歴史観の伝

統を清算しきれない日本の歴史教育への警告といってもよい。日本の軍国主義の指導者が靖国神社に祭られて神と仰がれ、多くの歴代閣僚が参拝して、祭神との一体感を確認する行為は、アジアの人々にとっては軍国主義が日本では是とされていると考えられることとなり、ライシヤワの主張とは全く相反するものである。

近年の日本の小学校・中学校・高校の歴史関係教科書は、改善されたようにみえる。第二次大戦中に犯した日本軍の侵略行為への反省はいくらか記述され反省のきっかけとなるようになった。しかしこれすら二つの要因で阻まれている。1つは教科にわりあてられた時間数の中で、古代から始まって近代あたりで授業は終わってしまい、現代史はとりあげられないでいること。他の一つは、上級学校の入試では、現代史はとりあげられない傾向があり、折角教科書で現代史の記述を読んで、それを手がかりに学習する気持ちはあっても、試験と直結しない領域は、受験者によって敬遠されるからである。

こういう状況があることに加えて、近年、自由主義歴史観にたつグループと称する人々が、日本の戦争責任の反省を自虐史として、戦争中の侵略行為を糊塗する歴史改革運動がはびこっているのも、国際化するべき日本の歴史教育としてはマイナスの要因となっていることは否めない。

1985年5月8日、ドイツの敗戦40周年にあたって、連邦議会で行った演説の中でドイツ連邦共和国(西ドイツ)のリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー(Richard von Weizsäcker 1920-)大統領は、今なお歴史に残ることばを残している。「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目になります。非人間的行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」¹²⁾と述べ、過去の歴史を直視し、再び誤りを犯すことのないようにすること、非人間的な行為を心に刻み、再びそのような行為をくりかえすことがないようにしなければならないことを示している。

また、1995年8月7日、ヴァイツゼッカーは、東京での講演「心に刻む日本の歴史——ドイツと日本の戦後50年」でも、「過去との関係で隣人や全世界との信頼関係を打ち立て、強固なものにすることは、われわれにとってきわめて重要です」¹³⁾。

と述べ、誠実かつ率直に過去と向き合うことの重要性を指摘している。日本の政権を握っている政治的リーダーでこのようなことばを述べたものは皆無に近く、積極的に世界の平和に裨するような行動が生まれにくいことは残念なことである。

NYとKLの子どもたちの歴史教育の実状をみると、望みある展望をみいだすことができる。NYでは、アメリカの学校として制度的に認められるために、「アメリカ社会」が必修教科となっており、アメリカの歴史や社会について学んでおり、異文化としてのアメリカの概要についてふれることができる。また国内への修学旅行、現地の子どもや、大人との交流をとおして、アメリカの現実の社会とそこに住む人々との交流の機会をもつことができる。

KLでも現地の地理・歴史について学ぶ時間が設けられている。

V 異文化体験の増進

NYでもKLでも異文化体験を得る機会の提供には、前にもふれたように、日本ではみられない充実ぶりがみられる。統計では得にくいものを、具体的なインタビューをとおして調べたものについて検討したい。このことにふれる前に、異文化体験が国際性の育成に、いかに重要かについてふれたい。

ライシャワーは異文化体験の重要性を次のように指摘している。

明治維新では日本の生存だけを考えればよかったが、今は世界の生存のために日本がなすべきことを学ばなければならないのです。世界の相互依存の深さを学び、世界の多様性を「人間の目」で知ってることが重要です。それには、世界を丸ごと自然に呼吸してきた帰国子女の経験が、かけがえのない価値をもっているのです¹⁴⁾。

ライシャワーが述べているように、世界の多様性を人間の目で、実際に体験した海外子女たちが、日本に帰って、かけがえのない価値をもって過ごされることの重要性を認識する必要がある。

異文化体験は重要であると考えられながら、それを阻害する要因がある。アジアの日本人学校について調べた小島勝氏によると、マレーシアでは、①「日本の受験体制」 ②「日本での生活を維持するのに不自由のない物・情報が現地で得られるから」 ③「塾やおけいこごとで忙しいから」 ④「帰国意識」 ⑤「現地の文化から学ぶことは、あまりないと親が考えているから」 ⑥「日本人学校の授業時間が過密だから」、を阻害要因としてあげている¹⁵⁾。私の調査では、小島氏のあげた③、⑤の要因に注目した。

また異文化体験促進の方策として、小島氏によると「現地の生活、風俗習慣について体験学習をする」が第一にあげられていることに注目したい。次いで「現地教材を扱った副読本を充実させる」「現地校との交流をもっと促進させる」となっている¹⁶⁾。

異文化体験について、海外で生活体験を持つ子供達が、どのような感想をもっているかについて、インタビューで得られたものの中、重要と思われるものを次にあげておきたい。

I. アメリカのシカゴの補習授業校3年の男子生徒のインタビューからは、

- ① これまでの生活で、積極的に自分の意見を言い、英語でアメリカの生徒に話しかけるようになった。
- ② 自分の意見を大切にしたいという気持ちをもつようになった。
- ③ 全体を一度みて、自分の考えをみて、それから発言をするようになった。
- ④ 海外での生活体験をいかして、大学生活が送れるようにしたい。

II. マレーシアのクアラランプール日本人学校に小4から中2まで在学していた現在、高1の女生徒は、

- ① 日本の生活よりマレーシアの生活の方がたのしい。
- ② 物価が安く、食べ物がとても美味しい。
- ③ 人々はとても親切であり、学校ではいじめがない。

Ⅲ. サウジアラビアで小5・6年と生活し、現在中2の男子生徒は、

- ① 日本から外に出て、日本を見て考え、日本のよい点、わるい点がよくわかる。
- ② 日本人はせせこましい。忙しすぎる。外国の大人、子供は大らかである。
- ③ 日本では皆と同じならば、問題ないが、目立つといじめの対象になることが理解できた。
- ④ 英語の勉強ができてよかったと思う。
- ⑤ 現地人の友人を持つことは大事だが、そのためには、何らかの趣味をもっていることが必要である。それがきっかけになって、多くの友人と交わることができる。

総じて海外の生活を通して得られた感想としては、下記のようにいえる。

- ① 日本人よりも海外で接した外国人は、大らかで親切である。
- ② 自分の意見を積極的にいう大切さが分かった。
- ③ コミュニケーションの能力を持つことの必要性を感じた。
- ④ 外国の友を持つことは、国際理解を深めるために大事である。
- ⑤ アジアの人々に対する偏見をなくすことが大切である。
- ⑥ 将来、国際性の観点からみて、自分の貴重な体験をいかしたいという意欲を持っていること。

等に、注目したい。

注

- 1) 田浦加津子 1999「ニュー・ヨーク日本人学校児童・生徒の国際性に関する調査研究」愛知淑徳大学「異文化コミュニケーション研究」第2号 Pp.53-79
田浦加津子 2000「クアラルンプール日本人学校児童・生徒の国際性に関する調査研究」愛知淑徳大学「異文化コミュニケーション研究」第3号 Pp.51-67
- 2) E.O. ライシャワー 納谷祐二 小林ひろみ 1989 日本の国際化——ライシャワーとの対話 文芸春秋社
- 3) 田浦武雄 1990 教育学概論(改訂版) 放送大学教育振興会 Pp.60-61
- 4) 江淵一公 自民族中心主義, 文化相対主義 石川栄吉編 1987 文化人類学事典 弘文堂 Pp.336-337, Pp. 671-672を参照
- 5) ライシャワー 前掲書 P.332
- 6) クアラルンプール日本人学校中学部 1998 人と心の交流—第6回マレーシアカンボン(故郷)ホームステイ感想文集
同小学部 1998 Balk Kampung—第1回マレーカンボンホームステイ感想文集
- 7) ライシャワー 前掲書 P.332
- 8) ライシャワー 前掲書 P.344
- 9) 納谷祐二・小林ひろみ 1993 ライシャワーの遺言 講談社 P.194
- 10) 前掲書 P.196
- 11) 前掲書 P.197
- 12) リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー 1986 荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領演説 岩波ブックレット 岩波書店 P.16
- 13) リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー 1995 心に刻む歴史—日本とドイツの戦後50年 東京新聞出版局 P.34

- 14) E.O. ライシャワー 日本の国際化 P.451
 15) 小島 勝 1998 アジアの日本人学校における異文化体験の現状 江渕一公編著『トランスカルチャリズムの研究』 明石書房 P.467
 16) 前掲書 Pp.469-470

別 表

平成10年度 国際理解教育全体計画

————— 学 校 教 育 目 標 —————

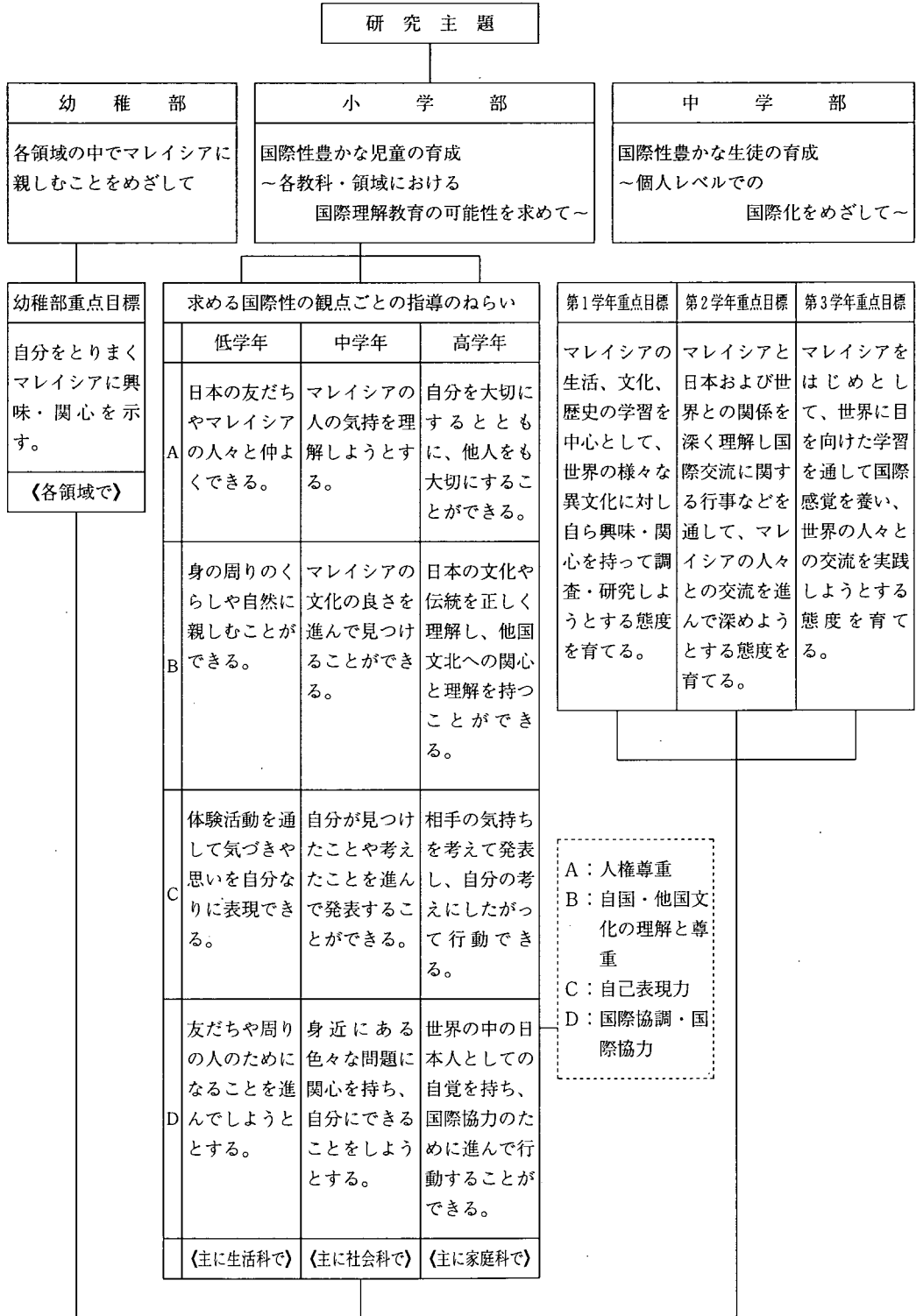
園児・児童・生徒のもつそれぞれの個性と能力を十分に、しかも調和的に伸ばさせることを基調に、たくましい身体と強い心とすぐれた知性ならびに豊かな国際性を持つ日本人の育成をめざす。

- 国 際 理 解 教 育 の ね ら い —————
- (1) 広い国際的視野の中で、日本の文化や伝統に深い理解と愛情を持つとともに、他国の文化風俗、伝統、人々の心を理解することのできる能力を育てる。
 - (2) 日本人として、国を愛する心を持つとともに、日本人としての自覚やものの見方、考え方についての基礎を培う。
 - (3) 国際平和の実現と人類の福祉の向上に地球的視点から貢献できる態度を養う。

————— 求める園児・児童・生徒の姿 —————

マレーシアでの様々な事象や変化していく国際社会の中で自ら論理的に思考し判断できるとともに、これからの国際社会の一員として望ましい行動ができる園児、児童、生徒

め ざ す 園 児 ・ 児 童 ・ 生 徒 像				
幼 稚 部 ・ 小 学 部				中 学 部
幼 稚 部	低 学 年	中 学 年	高 学 年	
マレーシアのくらしに親しもうとする子ども	マレーシアのくらしや自然に親しもうとする児童	日本や他国の文化を積極的に知るとともに、大切にしようとする児童	国際社会の中で主体的に生きぬく力を身につけようとする児童	<ul style="list-style-type: none"> ・自分以外の人々の存在を認め、互いに理解し学び合おうとする生徒 ・自分や自国の文化について自信を持って語ることができる生徒 ・自分で考え、判断し、行動できる、自立した心をもつ生徒



1 学級経営	各教科・道徳	特別活動	その他
<p>○ 相互理解 学年・学級集団の中で相互の考え、価値観を尊重し合い、偏見と差別をなくし、理解し合うとともに望ましい社会性を育てる。</p> <p>○ 人権の尊重 多民族国家マレーシアの中での人種間の人権を尊重する心情と態度を国際理解教育を通して学び、学校生活の中でもお互いの人権を尊重する態度を育てる。</p> <p>○ 現地理解 あいさつやインタビューなどを通して現地の人々、学校事務のスタッフの方々との交流を深め、マレーシアの習慣や風俗、文化などを理解しようとする態度を育てる。</p>	<p>○ 各教科 各教科のねらいをふまえながら国際理解教育との関連を図り、各教科の学習に意図的・計画的に位置づけることによって、求める国際性を育てる。</p> <p>○ 道徳 人間尊重の精神に基づき、計画的、発展的に「愛国心」「国際理解・人類愛」「国際的道徳性」、または求める国際性に関連したその他の価値項目についての道徳的実践力を育てる。</p> <p>● 教材研究 マレーシアをはじめとする世界、国内の環境、文化、交通、歴史、言語、習慣など様々な分野で国際理解教育としての教材開発を推進する。</p> <p>* 資料 「MALAYSIA」 * 「マレーシアだいすき」</p> <p>● 授業の研究 授業指導案の作成・改善を図るとともに、各教科・領域の目標に国際理解教育の目標を明確にし、授業研究を推進する。</p> <p>● 年間指導計画 各教科・領域の年間計画の中に国際理解教育の目標と視点を明確にし、年間を通じて計画的に国際理解教育が展開されるようにする。</p>	<p>○ 学級活動 国際交流会等を通して、学級活動内での異文化への関心を高めるとともに、自国の文化を再認識しようとする態度を育てる。</p> <p>○ クラブ活動 文化クラブ、運動クラブでの異文化活動に積極的に取り組み、意欲的に異文化に接する態度を育てる。</p> <p>○ ラジャブルック会（児童・生徒会）活動 ラ会行事、委員会活動を通して異学年との交流を図り、相互理解、人権の尊重、社会性を育てる。</p> <p>○ 学校行事 国際理解教育の実践を図り、現地での体験を通してマレーシアを理解する態度を育てる。</p> <p>・ 小学部国際交流会（招待・訪問）</p> <p>・ 遠足（幼・小学部：現地見学）</p> <p>・ 生活科、社会科見学（公共施設、企業網門）</p> <p>・ 校外学習 小学部 5年：ポートデイクソン 中学部 2年：ムルッ ・ 修学旅行 小学部 6年：マラッカ、ジョホールバル、シンガポール 中学部 3年：タイ王国</p> <p>・ 学習発表会「ベストスタン」</p>	<p>○ 校内環境の整備 校内・教室内に異文化に関する掲示物を貼り、異文化への興味関心を高めさせる。 * 異文化展示室の整備（国際ディレクター室）</p> <p>○ 日本人会への協力 在馬日本人としての自覚を育てるとともに、現地の人たちとの交流及び過去の日本人の国際交流の歴史に関する興味関心を育てる。</p> <p>・ 日本人墓地清掃のボランティア活動</p> <p>・ 盆踊り大会参加（中学部 3年生：太鼓、踊り手）</p> <p>● 日本語教室の開催</p>
<p>※○は園児・児童・生徒の活動</p> <p>●は教師の活動</p>			<p>・ マレーカンボンホームステイ体験学習（中学部・小学部 6年生）</p> <p>・ 中学部国際交流行事</p> <p>・ 中学部 1年：スバステック・チルドレンズ・アソシエーション訪問</p> <p>中学部 2年：SRI KL 校訪問</p> <p>中学部 3年：マラヤ大 学訪問</p> <p>・ ボランティア活動 障害者施設訪問活動</p> <p>・ 国際陸上競技大会参加</p> <p>・ 国際水泳競技大会参加</p>
<p>● 現地理解教育授業 国際理解教育授業として、マレーシアの言語、文化、教育、自然、衣食住などを題材にした現地理解教育の学習指導案の作成、改善を図り、その実践を行う。</p>			

求める園児・児童・生徒像の実現